

広島女学院大学における 「障がい者のための高等教育 支援開発研究」

広島女学院大学
障がい学生高等教育支援研究所

山下京子

広島女学院大学の概要

- 学生数 1813名 (2012年5月)
- 2学部5学科(全学改組により平成24年度から2学部4学科)
- 教員数 69名(特別任用含む) 職員数 66名(嘱託含む)
(2012年5月)
- 建学の精神 基督教主義による人間教育
- 教育理念 基督教主義に基づいて教育を施し、女子の靈性、知性、徳性の円満な発達をはかり、専門的な學術の修得に努めさせるとともに、二十一世紀の世界に貢献する広い教養と高い人格を備えた人材を育成する。
- 立地 JR広島駅からバスで約15分

平成23年度 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 構想調書 から

- 研究プロジェクト名 障がい者のための高等教育支援開発研究
- 研究テーマ名 障がい者のための高等教育支援開発研究
- 研究プロジェクトの主体となる研究組織名
総合学生支援センター/障がい学生高等教育支援研究所
- 大学の特色を活かした研究 3年
- 研究プロジェクトの位置付け（研究プロジェクトの大学における位置付けや基盤形成への役割等）

多様な障がいを抱える学生の障がいを、その学生の個性ととらえ、まわりの学生の人間性を確立するうえでも有意義なこ
とである。多様な障がいを抱えた学生を積極的に受け入れるにあ
たって障壁となっている課題を調査・研究するため、「総合学生
支援センター」内に「障がい学生高等教育支援研究所」を設置す
る。さらに、同研究所では、健常者と障がい者のへだたのない受
け入れを可能にする、ノーマライゼーションのための手段・方法
の構築、教材の開発、環境の整備に関する研究を行う。

平成23年度 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 研究テーマ調書から

本研究は、個々の学生のニーズに応じた教育機会を提供するという視点に立ち、視覚・聴覚・発達に障がいのある学生に焦点を当て、定型発達の学生とともに学ぶことのできる大学教育のあり方を検討する。

すなわち、障がいのある学生を特別なニーズを持つ学生として理解し、個々のニーズに対応した支援を行いながら、高等専門教育を行うという、高等教育における特別支援教育の開発である。

本研究は、大学教育のユニバーサル・デザインを構築することを目的とし、障がい者の理解について心理学を基盤にし、大学内の物理的環境について建築学の分野からモデルを提案し、教育内容については、教養教育として外国語教育、専門教育として文学と人文地理学を取り上げ、言語学、英文学、地理学の分野が連携しカリキュラム開発を行うという、複合領域的アプローチを行うことを特徴とする。

構想調書から 研究プロジェクトの意義・目的

「愛・平等・平和」 キリスト教主義に則り、
全ての学生に教育支援を行う。

教育システムの構築 多地点接続テレビ会議シ
ステム、文字判読音声化システム、音声認識シ
ステムの導入。

教育ネットワークの構築 他大学との連携によ
り、教養科目、専門科目の分担。



研究テーマ調書から 研究内容

特別なニーズを持つ学生の特性理解

学生の特別なニーズに対応する学内環境のあり方

教養教育と専門教育における教材、教授法、カリキュラムの開発

入学から卒業までの支援と社会への参画に関する研究

平成22年度までの障がいのある学生に対する支援の流れ(入学まで)

相談者 保護者・高校（進路担当、担任、養護教諭）



大学（相談窓口：入試課、教学課、学生課、健康管理センターなど）



面談

保護者と本人
大学（担当部署の教職員）



入 試

平成22年度までの障がいのある学生に対する支援 (入学後から卒業まで)

平成22年度までに入学前に相談のあった事例：

聴覚障がいのある学生、車椅子使用の学生、精神障がいのある学生など。

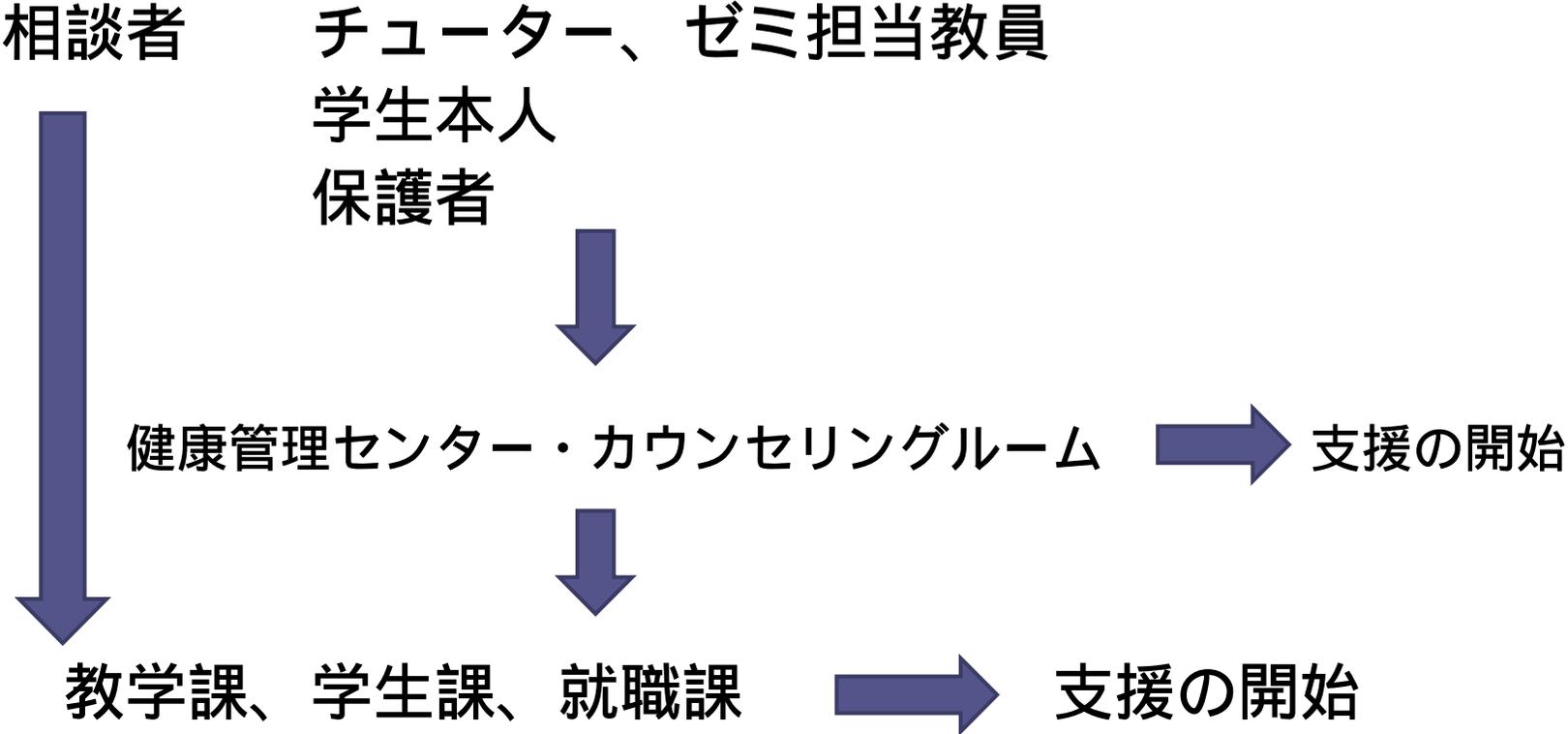
聴覚障がいのある学生への支援例：ノートテイカ（学生ボランティア）、講義内容のプリント配布、手話通訳(学外講師の講演など必要に応じて)他

身体的機能に障がいのある学生への支援例：各建物に休憩室を設置、学内移動用に電動自転車使用許可、送迎用専用駐車場設置 他

精神障がいのある学生への支援例：カウンセリングルームや健康管理センターによる支援、大学院生による修学支援、ピア・サポーターによる生活支援、学外医療機関との連携 他

就労支援として 学外機関との連携、本学職員として雇用 他

平成22年度までの障がいのある学生の支援の流れ(入学前に相談のなかった事例)



相談内容の特徴と支援の問題点

特徴：コミュニケーションに困難、ゼミでのプレゼンテーションに困難、卒業論文や単位修得に課題、低学力の問題 など。

ここ数年の支援の特徴として、発達障がい(疑いを含む)の学生への学修支援が増加。個別対応をしてきたが、教員による温度差がある。学力の問題がある場合は、卒業論文で苦勞する。

全般的に、学生の学力低下、授業への積極的参加の減少、授業中の私語・携帯使用(一部の学生だが) など。

出席さえすれば単位が出る、講義形式のような一方向の授業のあり方 など 検討が必要。

平成23年度の障がいのある学生に対する支援の流れ(入学前)

平成23年度

私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「障がい者のための高等教育支援開発研究」採択の通知 → 広報

相談 特別支援学校、高校
保護者

大学 学長・副学長 — 対応窓口の一本化、学内事務組織改編
CLC共通教育センター
障がい学生高等教育支援研究所

面談、学校訪問、オープンキャンパス参加(保護者と本人)

入試

平成23年度の実践

- 総合学生支援センター（障がい学生高等教育支援研究所が入る）の整備
- 多地点接続テレビ会議システムの構築
- 教育ネットワークの構築・・・「広島女学院大学とエリザベト音楽大学との協力と連携に関する包括協定」
- 学内環境の調査：卒業前の4年生全員に調査を実施・・・結果(部分) 大学構内の屋外環境における『移動』に関連した項目での評価が低く、本学のキャンパスの立地の特徴（傾斜面にそってキャンパスが広がっていること）を反映。

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業



「障がい者のための高等教育支援開発研究」
文部科学省平成23年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に、広島女学院大学が申請した研究プロジェクト「障がい者のための高等教育支援開発研究」が採択されました。新設の「障がい学生高等教育支援研究所」を中心に、多様なニーズをもった学生に対する教育力向上の手法開発を行い、その成果を初年次教育や専門教育の見直し、カリキュラムや教材の開発、教育環境の整備などに対してフィードバックします。

障がい = 特別なニーズをもつ
学生と共に学ぶために
個々の障がいを、その学生の
個性ととらえることは、周りの
学生の人間性を確立するう
えでも有意義なことです。本
研究プロジェクトは、障がい
のある学生を特別なニーズを
もつ学生として理解し、個々
のニーズに対応した支援を行
いながら高等専門教育を行う
という、高等教育における特
別支援教育の開発です。その
拠点となる総合学生支援セン
ターを案内します。

総合学生支援センター（TSSC）とは？

総合学生支援センターは、全館をキリスト教主義の「隣人愛」に基づき、人に優しい空間としています。「環境が人を育てる」という建築家・渡邊公正氏の設計デザインで、環境に配慮した建物に改築されました。体に影響を及ぼす空気や光の存在を再考し、室内の空気を汚さない建材を使用しています。1階から4階まで、赤土色が特徴の「京の赤壁」の部屋と、地元の土を丁寧に練り込んだ壁土の部屋があります。また、壁や天井に反射させる間接照明は各部屋をほのぼのとした空間へと変化させ、そこに憩う人々を優しく包んでくれます。1階には「コンシェルジュ（総合案内、学生相談窓口）」があり、特別なニーズをもつ学生を含む全学生への個別サポートを行っています。2階の「障がい学生高等教育支援研究所」では、健常者と障がい者の隔てのない受け入れを可能にする、ノーマライゼーションのための手段・方法の構築、教材の開発、環境の整備に関する研究を行っています。3階は、ピアチューター（特別なニーズをもつ学生への支援ボランティア）を養成・訓練することを目的とするフロアです。4階は、視覚・聴覚障がい者、および発達障がい者の支援のための研究スペースです。車いすでも自由に出入りできる健康管理センターも設置しています。.

「環境が人を育てる」“ユニバーサルデザイン”の教育実現へ



「コンシェルジュ（総合案内・学生相談窓口）」は、特別なニーズを持つ学生を含む全学生への個別サポートを行う。具体的には、履修モデルの構築などのカリキュラム指導や、課外活動を含む学生生活におけるニーズへの対応を行う。学生支援窓口と相談室との壁を取り除き、多目的に使える相談室とした。

「学生支援室」（3室）では個別面談を行うほか、高速通信回線を用いた遠隔授業（授業の視聴と参加）が可能。



「ピアチューターサポートルーム」では、特別なニーズを持つ学生への支援を通して、多様な特性をもった学生同士が相互理解を深める環境を整える。そのために、ピアチューターのコーディネートと教育・訓練を行う。ピアチューターの活動を通して、障がいを持つ学生も、定型発達の学生も、『共に生きる』大学教育のあり方を、学修および課外活動といった学生生活の様々な場面において具体化する。



「障がい学生高等教育支援研究所」では、特別なニーズをもった学生に対する教育力向上の手法開発を行う。また、衝動統制・注意・時間空間感覚等に関する心理学的実験を行うことを通して、特別なニーズを持つ学生の特性理解に基づく、より適切な支援のあり方を研究する。「研究情報公開ラウンジ」や、多様な学生が自由にくつろぐことのできる「ウーム」と呼ばれる休憩室を置く。



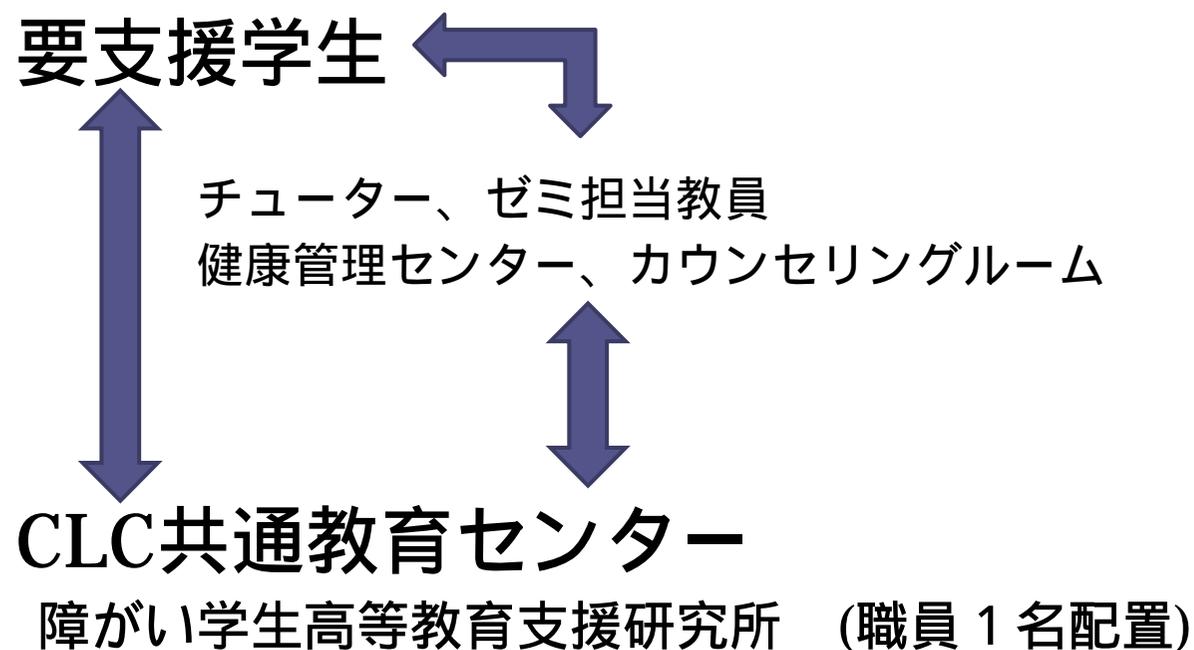
「視覚・聴覚障がい者支援研究所」では、特別なニーズを持つ学生の生活支援や、学習支援プランの立案を行う。また、「発達障がい者支援研究所」も併設。障がいを持つ学生が自己理解を深め、自分の障がいを認知するとともに、セルフ・アドボカシースキル（自己権利擁護）を身につけることができるように、カウンセリングを実施する。

「健康管理センター」では、特別なニーズを持つ学生を含む全学生の健康管理を行う。

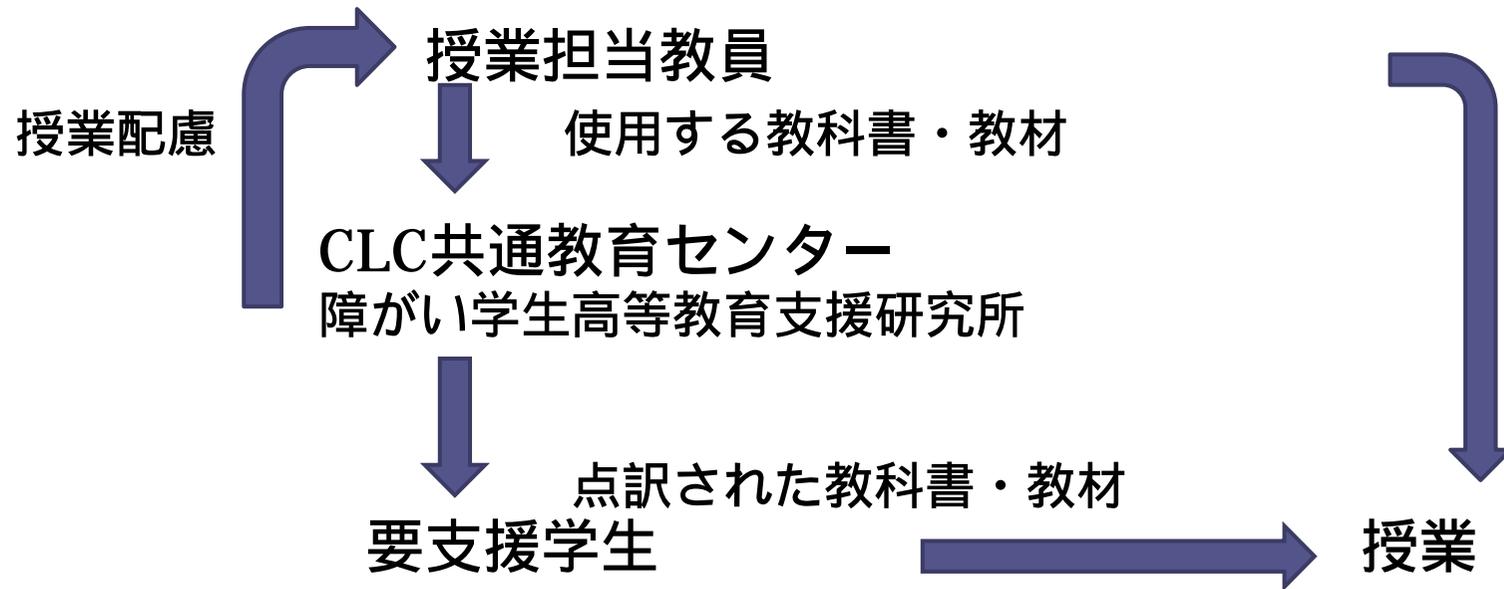


平成24年度 障がいのある学生に対する支援の流れ

CLC共通教育センター：全学生を包括的に支援する ワンストップ型組織



視覚障がいのある学生に対する学修支援



CLC共通教育センターから、「特別なニーズを持つ学生に対する授業配慮について 2012年度版」を作成し、全教員に配布。

情報関連科目（必修）については、特別支援学校の先生と相談のうえ、個別指導。広島市福祉協会から講師派遣。

試験については、時間延長、別室受験。

障がいのある学生に対する支援

- 毎週 1 回昼休みを利用して、支援ミーティング

副学長 CLC共通教育センター

障がい学生高等教育支援研究所
事務局長、ボランティアセンター



チューター教員

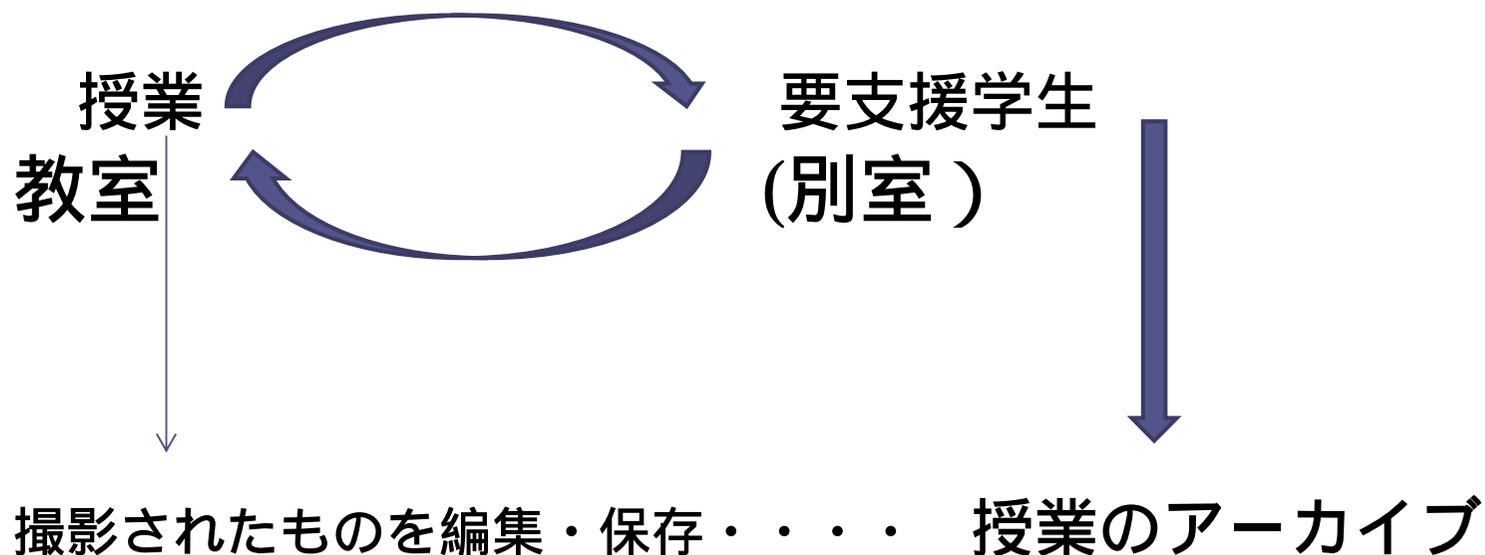
ゼミ担当教員

授業担当教員

- ピア・サポート活動(キャンパス・サポーター)の一環として、学内動線の見守り調査の実施(5月と7月に1～2週間ずつ)
- ボランティア活動への積極的参加を支援
- 学内におけるシャトルバスの発着場所の変更

教育システムの構築

- テレビ会議システム利用による遠隔授業 予備実験済

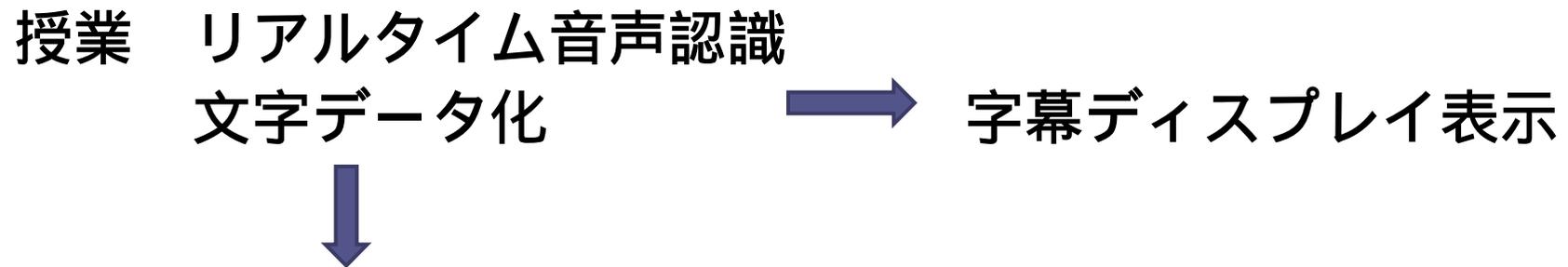


想定される対象学生：集団が苦手な学生、精神障がいの学生、発達障がいの学生など

教育システムの構築その2

- 音声認識装置システムの導入 事前準備中

事前準備：教員個別の音声プロファイルの作成



授業終了後 認識したテキストデータを編集・保存

想定される対象学生：聴覚障がいの学生、発達障がいの学生

問題点と今後の課題

- **教育システムの運用**(テレビ会議システム利用による遠隔授業)に関すること

学内の全ての教室で利用できるわけではなく、教室が限定されていること。システムの利用できる授業とそうでない授業が出てくる。

事前の準備が必要なので、授業実施者の負担が増える。教材の工夫、板書の仕方、などに課題がある。

リアルタイムでの質疑応答など、積極的な学修姿勢を育むことをねらっているが、利用する学生のニーズと合わない可能性も大。

- **支援を必要とする学生に関すること**

「障がい」の名称がついたことで、支援を受けづらい思いをする学生が出てきた。

他の人に自分の障がいを知られたくないという理由から、支援を受けることに消極的な学生もいる。

学生が支援を受けやすい環境を作ることが課題。